

## ◇ワークショップ 8 “甲状腺” 診断困難例への挑戦

## W8-1 甲状腺における液状細胞診の有用性

愛媛県立中央病院病理診断部<sup>1)</sup>, 愛媛県立中央病院検査部<sup>2)</sup>

○前田智治(MD)<sup>1)</sup>, 古谷敬三(MD)<sup>2)</sup>, 平田真紀子(CT)<sup>2)</sup>, 兵頭直樹(CT)<sup>2)</sup>, 大泉えり子(CT)<sup>2)</sup>

液状細胞診 (Liquid Based Cytology, 以下 LBC) も普及しつつあるが, 甲状腺穿刺細胞診の LBC に関する報告はまだ少ない。甲状腺穿刺細胞診を LBC に移行するため, 外科切除甲状腺で LBC と従来法の細胞像の比較検討を行い, 従来法と LBC の併用を経て LBC 単独に移行した。甲状腺穿刺細胞診において LBC の有用性および細胞像について述べる

【目的】甲状腺穿刺細胞診は併用期間を経て従来法から LBC 単独に移行した。従来法から LBC に移行したことによる診断成績の推移, LBC と従来法の細胞像の違いについて報告する。

【方法】従来法単独 650 症例, 従来法・LBC 併用 93 症例, LBC 単独 202 症例の標本枚数, 不適検体率, 陽性率などを検討した。外科切除甲状腺 35 病変および組織で乳頭癌と確認された穿刺細胞診従来法 21 症例, LBC20 症例の細胞所見をスコア化し細胞像を比較検討した。LBC 標本は SurePath 用手法で作成した。

【成績】従来法単独 650 症例の標本枚数は 2 枚~10 枚 (平均 3.81 枚), 不適材料 81 例 (12.5%), LBC 単独 202 症例の標本枚数は 1 枚~4 枚 (平均 1.18 枚), 不適材料 12 例 (5.9%) で, 不適材料が半減し, 標本枚数は約 3 分の 1 となった。外科切除甲状腺 35 病変をスコア化して従来法と LBC 標本の細胞像の比較したところ, 細胞出現パターンに差はみられず, 核小体, 核の「シワ」の有無に有意差がみられた。乳頭癌と確認された症例の比較では, 核小体, 核の「シワ」, 核溝の有無に有意差がみられた。

【結論】LBC は不適材料が半減し, 標本枚数を削減でき, 業務改善に有用であった。LBC 標本では, 核内細胞質封入体, 繊細な核所見に加え, 赤染する核小体と核の「シワ」に注目する事が乳頭癌の診断に有用であると考えられた。

## W8-2 甲状腺悪性リンパ腫における超音波検査・細胞診・CD45 ゲーティング併用の意義

隈病院臨床検査科<sup>1)</sup>, 隈病院病理診断科<sup>2)</sup>, 和歌山県立医科大学臨床検査医学<sup>3)</sup>, 隈病院外科<sup>4)</sup>

○柳瀬友佳里(CT)<sup>1)</sup>, 廣川満良(MD)<sup>2)</sup>, 前川観世子(CT)<sup>1)</sup>, 隈 晴二(MD)<sup>2)</sup>, 網野信行(MD)<sup>1)</sup>, 中村靖司(MD)<sup>3)</sup>, 宮内 昭(MD)<sup>4)</sup>

はじめに: 甲状腺悪性リンパ腫 (ML) と慢性甲状腺炎の鑑別はしばしば困難である。今回われわれは, 甲状腺 ML の術前診断における超音波検査, 細胞診, CD45 ゲーティング (CD45G) の診断精度とその併用の意義を検討したので報告する。対象: 慢性甲状腺炎あるいは ML が疑われ, 超音波検査, 穿刺吸引細胞診, CD45G が行われ, その後, 組織検索, CD45G, 遺伝子再構成, 染色体検査などにより診断が確定した 49 例および半年以上の経過観察にて良性と判断された 56 例, 計 105 例 (ML43 例, 慢性甲状腺炎 62 例) を検討対象とした。CD45G の結果は,  $\kappa$  と  $\lambda$  の比が 5 倍以上を悪性, 3 倍以上, 5 倍未満を境界, 3 未満を良性とした。結果: 超音波検査では 26 例を ML, 54 例を ML 疑い, 25 例を良性と判断し, そのうち 25 例, 16 例, 2 例が ML であった。細胞診では, ML が 24 例, ML 疑いが 33 例, 慢性甲状腺炎が 48 例で, それぞれ 23 例, 19 例, 1 例が ML であった。CD45G では, 悪性が 25 例, 境界が 17 例, 良性が 63 例で, そのうち 22 例, 9 例, 12 例が ML であった。超音波検査, 細胞診, CD45G の感度と特異度は, それぞれ, 57.1% と 35.9%, 52.4% と 73.4%, CD45G 50.0% と 79.7% であった。上記 3 つの検査のうち少なくとも 2 個以上が境界もしくは悪性であった 62 例中 43 例 (69.4%) が ML で, 1 個のみ境界であった 22 例は全例良性であった。2 つ以上が悪性であった 24 例中全例が悪性であった。考察: 甲状腺 ML の術前診断では, 超音波検査, 穿刺吸引細胞診, CD45G の結果を総合的に判断することが重要で, これらの 2 個以上が境界もしくは悪性であった症例が確定診断のための切除対象になると考えられた。